

A stylized illustration of a man with a large nose, wearing a dark hat and a dark jacket with a striped shirt underneath. He is smiling and holding a pipe in his mouth. The illustration is on the right side of the page.

私はまだかつて

嫌いな人に逢ったことがない

A stylized illustration of a man with a large nose, wearing a dark hat and a dark jacket with a striped shirt underneath. He is smiling and holding a pipe in his mouth. The illustration is on the left side of the page.

淀川 長治

淀川長治
よどがわながはる

明治42年4月10日神戸に生まれる。
映画評論家。映画友の会主宰。ユナイ
テッド・アーチスト映画社宣伝部長、
「映画の友」編集長をへて、現在テレ
ビ、雑誌などで活躍。
主な著書：「映画散策」「サヨナラ、サ
ヨナラ、サヨナラ」「淀長映画館」「映
画と共に歩んだわが半生記」

私はまだかつて嫌いな人に逢ったことがない

昭和48年11月10日 第一刷発行

昭和49年1月10日 第五刷発行

著 者 淀 川 長 治

発 行 者 錦 茂 男

発 行 所 P H P 研 究 所

京都市南区西九条北ノ内町11

印 刷 日 本 写 真 印 刷 株 式 会 社

©Nagaharu Yodogawa

0095-060800-7159

サヨナラおじさん

サヨナラ……

私の解説しているテレビの「日曜洋画劇場」は、毎回ビデオで撮っているのです。なるべくならナマでやりたいのですが、なにしろ晩の十一時に終わるから前もって撮られるのです。それらの映画はずっと前、それが日本に入ってきた時みているのですが、もう五、六年はたっている。あるところは忘れてるので、おしゃべりをするために私ひとりでもう一度みます。みなからメモをとり、それを持って二、三日たってから録音室に入ってしゃべります。原稿を書いてそれを暗記してしゃべるのはお客さんに失礼です。心からしゃべらなくてはいいけませ

ん。それでいつでも、ますぐともよくとも元気いっぱい「ハイ！」これで始めます。私の悪い癖、いい癖です。そして「サヨナラ、サヨナラ！」で終わるわけです。

そのような録画ですから、私はもう一度みなければならぬ。私はあるときこれを言ったかしら、この場面のことを言ったかしら、ひやひやしながらみています。やがてCMの後、いやな顔が出てきます。自分の顔をみるのはとてもいやなものです。しかも最後に「それではみなさん、次週をお楽しみに、サヨナラ……」です。あの顔をみた晩は胃酸カ리를飲みたいですね。

なんであんなにベタベタものを言うのだろうか、次週はもうみまい、と思っても、絶対みなければ気がすみません。仕事には責任があります。しかし、それを五年半やってきてつくづく感じたことは、私があのとときもつとスマートに、勝新太郎のように「サヨナラ！」といえばカッコはいいかもしれない。しかしそれは自分ではない。人のまねです。私にはそのようなタイプにはなれません。祖母に、母に、姉二人に育てられ、甘やかされたから、こういう人間ができた、情ないけれど自分自身です。この広い日本国中に自分と同じ人はいない、そう考えつめていくと自分にしかないものをみがき、人のために役だったらいじゃないか、という考えになってきます。道ばたや電車のなかで「ああ、あれは、サヨナラさんだ。」といわれるようになります、きらわれていないのだ、と知ることはいらないのです。私はそれで安心していきます。

そういうことで皆さんも自分自身をみがいて下さい。それが「個性」というものです。

一睡もしない夜

私事ですが、私はゆうべ一睡もしていません。しかし私は元気です。それはいつでも一日一回、「ああ、いいなあ」というものをつかまえないと寝ない訓練をしているからです。

私は普通は毎朝九時に起きます。部屋を掃除し、新聞を流し読みします。十一時ごろ手紙がきています。一日平均二十通ぐらいの手紙がきます。中学生、高校生、お母さん等から、いろいろな手紙があります。

百円札が入っていて——淀川おじちゃんの写真をおくれ——

九州の子どもさんからは——父と母と私と三人で「日曜洋画劇場」をみています。やがて淀川さんが出てきました。母がいいました。この人だけは死なせたくないいね——

まあ、いい手紙だなあ、それらは晩に読むことにします。

そして私は毎日、一時と三時の二回、あるいは一時の一回、一本あるいは二本の映画を試写室へみにいきます。そのあと座談会や講演会があったりで、家に帰るのは夜の八時です。夕刊

をみて、さっきの手紙を読み、十一時前に風呂に入ります。

さて、こうみえてくると、私は朝から運動らしい運動をしていません。健康がどんなに大切な。そこで私ははずかしいが風呂に三十分から一時間、出たり入ったりします。洗わないで体操をします。シャワーを浴び、水でマッサージュしたりし、出てからレモンをしぼって飲みます。そして夜の二時まで原稿を書きます。

明日は講演があつたのですが、疲れているので寝ようと思いました。講演のことはあした夜明けに起きて考えようと思いましたが。しかし寝られないのです。なぜ？　こわいのです。このまま寝ていいのかと思います。あなたは朝からいったいどれだけの勉強をしたの？——新聞読んで、映画を一本みて、座談会をして、また新聞読んで、手紙みて、原稿書いて……これで寝ていいのですか。あるいは一日にこれだけの勉強で喜んで寝るのですか。なんとさもしい、貧乏くさい淀川なんでしょう。私はこわいのです。そして本棚から三冊の単行本を出して、ちょっとだけ——二十分、読もうとして、二時から読みました。『ジョン万次郎』、これをもう一度、いや、いや『サラ・ベルナル伝』これだ。

面白い、面白い。読んでいるとサラ・ベルナル（フランスの女優、一八四五—一九三三）の、仕事に対する自信がみごとに描かれています。

ジャンヌ・ダルクの二幕目のところで、幕が開き、裁判官が出てきてジャンヌ・ダルクに「あなたはいくつじゃ?」「ハイ、わたしめは十九でござります」そう言った。ジャンヌ・ダルクに扮するベルナル、実は六十八なのだ。六十八の彼女が「十九でござります」といった時に、会場でいっせいに拍手がおこった。すると彼女はみんなに最敬礼をしたのでした。

私はそこを読んで、涙がたまってきました。六十八の彼女がその晩、十九歳の女になってみせる。その自信、なんて立派だろう。

それに熱中して時計をみたら、四時。明日は六時に起きて講演のことを思っていたのに……あわてましたが興奮して寝られません。そのまま一息つき、講演のことを考え、それからズーッと起きていま講演にきているが、ちつとも疲れていません。六十三のじじいが昨日寝ないでここに出て、こんなに疲れないのは『サラ・ベルナル伝』のおかげです。みなさんは一日一回、このようなことをやっていますか。なにも感激がなく退屈で、駅前でパチンコでもやるか。もしも若い人がそれだったらこわいです。いや、ぼくは目下熱烈な恋愛中、それはいいですね。それぐらいの勇氣、エネルギー、人生の愛情、自信などがなかったらダメですね。

美を食べる

そして私はガツガツ美の探求をします。美を食べようとあせります。なぜ私がそんなことをするのでしょいか。ゴヤの展覧会、ご覧になりましたか。あるいはレンブラントでもいいですね。さて「レンブラント」と一緒にみにいきましよう。

きれいですね。なんてきれいなんでしょう。あの花の艶のいいこと。あの金髪、あのオランダ人の絵、まるで生きているみたいです。ローソクの光がピカッと光っています。油絵でよくもここまで、これだけの絵が描けたものだ。彼はいったい何年前にこの絵を描いたんでしょう。調べたくなる、夢中になる。そして胸がたか鳴る、そう思ったとき、もうけものですね。美を食べているのです。そしてプログラムを買いおうとする。五〇〇円！ 高い！ 五〇〇円なんてとんでもない。しかしその瞬間には全然惜しくない。パッと買っちゃうのですね。五〇〇円よりもレンブラントがどんな絵かきか、それを調べたくて、平気になるのです。もうけものです。レンブラントとはこんな人、老いた晩年には、貧乏で、乞食になって、絵筆が一本と画布が一枚だけ、すごいなあ。なんというかわいそうな最後なんだろう。しかもいま彼の絵はニューヨークで一枚一億円もしている。この絵かきはなんてバカなんだろう。生きているとき

にはこんな貧乏をしている。なんて世の中の泳ぎ方のへたな人なんだろう。そう思うのは一瞬間、その後で立派だと思えます。その時、それらを生むことは、お金じゃあないんだ、生命がけでなにかやろうと、美を探求しているんだなあ、とわかります。

例えばみなさんが、マアゴット・フォンテーヌとかヌレエフのすごいバレーをご覧になったとします。びっくり仰天です。私は、ニューヨークでも、東京の厚生年金会館でもみました。すごいですね。幕が開くと二人がサーッと出て、パッとポーズをとります。そのポーズの瞬間の手が、姿が、どこから見ても美を崩していません。なんてきれいなんでしょう。その瞬間、お腹の中で美があふれます。やがて、その三千円の入場料でおれは損したどころか、えらい得をしたと思って帰ってきます。あの人たちは、三千円のために踊っているのではない、生命がけで美をみがいて、みがいて、その瞬間を踊っている。仕事する人、すべてこれなんだなあ、とわかってきます。お金じゃあないんだ、「給料いくらか」、「春の闘争は……」なんてではないんだ。もっと大きい力で仕事を愛して、愛しきった時、そこには美が生まれます。

さて美とは何だろう。そして美を食べる過程で、芸術というものの、それは誠実ということがわかってきます。やっとそれに気づくのはズーッと先です。いまみなさんは、個人主義で、どんなワイフをもらおうか？ どんなマンションに住もうか？ 月給は？ ボーナスはいくらだ

ろうか？ 自分のことだけではないでしょうか。もつと強く、この仕事が好きです、これ以外の仕事はできない、そう思っているとお金はあとからついてきます。その豊かさは、二十や二十八ぐらいではやってきません。五十、六十になってやっとわかる。そのころにはもうおむかえがきます。人生とは皮肉にできていますね。私にはそれがやっとわかり始めました。人間とは、何だろうかということが。

私の母は二年前の五月二十九日に亡くなりました。つらいなあと思いましたが、その瞬間にだれでも死ぬんだということでなぐさめをもちました。母も死ぬんだ、しかしみんな死ぬんだからしかたがない。バカバカしい、そんな人生——死ぬために生まれてくる。なら遊ぶだけ遊んで、お金を無駄に使って、なかったら会社から盗んで使って、生きたらいいじゃないか。しかしそう思うのは一秒間ですね。そのあとで、それがいいかどうか、もつと生き方があるんじゃないか、死ぬんだから生きようと思います。

すると人とはこういうものと、わかってきます。「人」とはこんな字を書く。二本の棒がもたれあっている。人という字をむかしの人はなんてうまく書いたんでしょう。もたれあっている、だれかともたれあって、人、^{あいだ}なのですね。人間とは何でしょう。「人の間」と書いて、人

間々です。なんてうまい字を生んだのでしょうか。人間とは一人では生きられないのです。

そのためには、いろんな鞭を自分に与えます。例えばここにメモがあります。「才能は生まれつきのものでなく、育てるものだ」自分も才能のある人になりたい。しかし親はバカだったから、私はダメだ、そう思ったときに、さっきのメモが役立ちます。そして「天才」とは九十九%が汗で、1%がインスピレーションだと。従ってだれでも天才になれるのだ、それらをどんどん学んで、立派になろうと思います。しかしお金のために立派になろうと思っただけじゃありません。このような精神をもったのも、小さい時から映画をみてきたせいかもしれません。

映画への招待状

チャップリンの世界から

私にとっての映画とは、日曜学校でした。「チャップリン」の映画は私になにを与えてくれたか。食べることに、いつでもチャップリンの映画は、食べることに面白くてゲラゲラ笑っていました。

——貧乏な彼が、イギリスからアメリカに移民する。金がない。船のキップだけ、やっと手に入れた。そして船に乗っている。腹がへったけれど食堂へいくには金がある。こまったなあ。まあ、食堂をのぞいて、においでもすってやろうといく。あの塩と、水くらいはただでい

ただける。入ってテーブルにすわる。「スーッ」ああ、いいにおいがしてくるなあ。この塩でもなめておこう。ところが、となりのおっさんは、四つも、五つも皿を並べて食べている。そのにおいをすっては塩をなめている。ああ、つらいなあ。

すると、しけで船が揺れてきた。だんだん揺れが激しくなってきた。となりのおっさんは一生けん命食べているが、揺れると、その皿がこちへ流れてくる。彼の目の前に皿が流れては、戻っていく。また流れてきた。たびたび目の前にソーセージが流れてくるので、一つぐらいいいだろう。とった。おっさんは横をみないで食べている。また流れてきた。また一ついた。だいた。とうとう彼は流れ作業によって一皿食べてしまった。おっさんは、はやく済んだなあと思うだけで、出ていった。チャップリンは楊子をくわえて、「アー、ゲップ」なんて。ただで食べちゃった――

面白くて、ゲラゲラ笑いました。

また「キッド」という映画があります。

――ひろった子どもと二人の、チャップリンの貧乏暮らし。一生けん命働いている。働くがなかなか金が入らない。けれども、がんばる。そして、子供は「おとちゃん、いつてきます」と言いながら、石やり鉄砲を持ち、ポケットに小石を人れ、おまわりさんや人々を警戒し

ながら外へ。だれもいないと、あちら、こちらの、ショーウィンドウのガラスを「バーン」と割る。悪い子どもだ。またやる。すると、あとからチャップリンがガラスをいっぱい背中の中にのせて、「エー、ガラス直しありませんか。ガラス屋、ガラス屋です」と歩く――

まあ、子どもと共同で働いています。その映画の中で、彼がその子どもと朝ごはんをとっているところ……。

――ホットケーキを三、四枚つくって、二人で食べよう。それを半分に切って、二人でたべようという時の彼と子どもの真剣な顔。しかも手で、キチッと半分になるようはかって、双方で損しないように食べる――

あの真剣な顔を見て、おかしくて大笑いしました。しかし戦争中、食べるものがなかったとき、あの真剣さがわかりました。

「モダン・タイムス」では、チャップリンは妙なまちがいで監獄にぶちこまれました。囚人服のチャップリン。囚人食堂、たくさんの囚人が号令一下あわてて食卓につく。パンがくばられスープと貧弱な豆の皿。チャップリン胸を張りスプーンを囚人服の胸でふいてあわててスープを、そして目の前のパンを、すると隣のこわい巨漢囚人サッとチャップリンのパンを横どり。あわてたチャップリン、取り返そうとするが相手はにらみをきかし返さない。そこでチャップ

リン手を廻し相手の男のその向こう側のわきの下をチョコチョコとかいた。くすぐったいし誰であろうと向こうをヒョイとむいた瞬間にチャップリンは凄く早さで自分のパンを取り戻しました。

チャップリンの映画では、いつもこの食べるシーンで腹の皮をよじらせて笑わせます。しかし二回、三回と見るうちにこの食べるシーンが笑えなくなってきました。悲惨で悲しく痛ましくなってきました。「黄金狂時代」では、アラスカの雪山の山小屋の中で数日の飢えのあまり、チャップリンはローソクを食い靴の片方までも上手に気分を出して食べてしまいます。そのうちに同居の巨漢の目が落ちくぼみその飢えの狂乱がチャップリンをニワトリに見えだしてきて、ナイフでチャップリンを追っかけ始めます。

チャップリンは五歳の時に父を失い、貧苦のために狂人となった母と二人っきりで暮らした経験があります。腹ちがいの兄がいましたが、この貧しさに家出して船のボーイとなりました。残されたチャップリンは頭の狂った母の寝台の足もとで飢えに泣き、空腹のあまりマーケットをうろついて捨てられたくさったリングを拾って食べたこともありました。

人の愛に飢え、食事に飢えた、このチャップリンの幼年の苦しい経験がチャップリン映画では爆笑の種になっています。

このように、チャップリンの映画をみていると、食べること―ただもう夢中だ。働くこと―生命がけ。そして力いっぱい愛すること。少年の私は、食べること、働くこと、愛することの三つを、チャップリンのこれらの映画でどんなに教えられたことか、ケチケチするな、大きく愛し、大きく食べ、大きく働けということを教わったのです。

ミラクル・ウッド

ハロルド・ロイドというのは昔の喜劇役者ですが、どんなに私に栄養を与えてくれたか、本当に感謝したいです。そのロイドの喜劇に非常に気の弱い少年から始まる映画があります。

その少年は、小学校のときも、ものが言えない。中学も、大学もおなじ。前に人が通って「こんにちは」といっても、ダメ、女の子がそばにいますと、まっかになって、うつむいてしまう。銀行に就職したが、ものが言えず陰気でした。あいつ駄目だ。ものもろくにいえぬ……とみんなに思われる。「よう、おはよう」「……」「感じ悪いやっちゃんあ」本人はつらい。なにか言いたい。「おはよう」と言いたいが出てこない。

おばあちゃんだけで育てられた彼がある日、「ちょっと、おいで」と呼ばれた。彼が、「ハイ、

なんですか」というと「ほれ、アルバムがあるの。おじいちゃんの写真みてご覧。南北戦争のとき、北軍の將軍でしょう。えらい勲章があるでしょう。ああ、おじいちゃんは偉いおかたでしたねえ。……これにはわけがあるのです。あんた、だれにも言いませんか?」「ハイ、おばあちゃん、どんなわけがあるの?」「だれにもいいませんね。ちょっと待っていらっしやい」おばあちゃんは奥からなにか箱をもってきた。箱の中のハンカチを開いて、小さな木切れを出してみせた。「実は、この木切れが勇気の出るお守りなんです。おじいちゃんは戦場でズーッとこれを持っていて、弾にあたらなかった。これを持っていると勇気が出た。おじいちゃんはこの木切れのおかげで、本当に立派なおてがらをたてられたのですよ。この木切れをあなたに今、あげますからお持ちなさい」「まあ、おばあちゃん、そんな木切れもらってもいいの?」「いいですよ」

ロイドはそれをポケットに入れて銀行へいった。途中に溝があつていつも渡れない。あぶない、おちたら大変だから渡らない。しかし、この木切れがあるんだから、ひょっとしたら守ってくれるかもしれない。彼はその溝を「ワン、ツー、スリー、ヨーッ!」とべた。「とべた! この木切れでとべた。なんてあらたかな木切れだろう」彼はこれを持っているおかげで銀行へいって、みんなが「おはよう」といったとき、「おはよう!」といえた。「あつ、あいつ今日返